

令和6年度

研 究 紀 要



秋 田 県 立 増 田 高 等 学 校

目 次

目 次			1
《 学 科 》			
令和6年度総合学科アンケートの結果について	総合学科主任	藤谷 聡	2
令和6年度農業科学科生徒アンケートの結果について	農業科学科主任	藤井 亨	6
《 職員研修・教科研修 》			
令和6年度 研修計画（校内・校外）		研 修 部	7
令和6年度 職員研修会		管 理 職	13
令和6年度 校内授業研修会		保健体育科	14
		商 業 科	16
		理科（化学）	18
令和6年 英語教育推進チーム学校訪問に係る研究授業		英 語 科	20
《 研修報告 》			
実践的指導力習得研修（2年目）を受講して	理科（化学）	伊藤 智樹	23
実践的指導力習得研修（2年目）を受講して	商 業 科	藤原 一誠	24
中堅教諭等資質向上研修講座を受講して			
選択研修報告, 特定課題研究レポート	国 語 科	長谷部 さとみ	25
C-47 研修講座を受講して	道徳教育推進担当	山本 博史	28
《 実践発表 》			
令和6年度 秋田県高等学校教育研究会農業部会 農業教育研究大会			
「生徒の実践的・体験的な学習活動を推進するための農場運営はどうあるべきか」	農業科学科	藤井 亨	30
編集後記			

学 科

令和6年度総合学科アンケートの結果について

総合学科

令和6年度総合学科3年生を対象に1月にアンケートを実施した(GoogleフォームによるWebおよび紙媒体による)。集計した結果を過去2年間と比較して報告する。

総合学科で学んだことを肯定的に前向きに回答している生徒がほとんどであり、生徒の本学科に対する満足度は高いものであったと判断できる。しかし、総合学科を理由に本校を選んだ生徒は約半数であり(質問1)、総合学科の特性について十分理解せずに入学してきた生徒が一定数いるものと考えられる。その結果が、「系列選択の時期が早い」(質問9)、「系列の変更を希望したいと思ったことがあった」(質問11)といった回答に現れており、全体の2割弱を占めていた。こうした問題点をふまえたうえで、数年後に予定されている統合校設立に向けて望ましい総合学科のあり方を検討していく必要がある。

進路決定の時期は年々遅くなる傾向にあり(質問15)、約半数の生徒は3年になってから具体的な進路希望を決めている状況にある。そのため進路希望決定から受験までの準備期間が短くなるのが危惧される。

総合学科での学びを通して、自分自身が成長していることを実感している生徒が多数を占めているが(質問18~23)、ほとんどの質問で「とてもそう思う」という回答が半数を超えていない。大多数の生徒が「とてもそう思う」と回答できるように、「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」、各系列の授業においてより一層の指導の工夫を講ずる必要がある。

	R4	R5	R6
回答人数	61人	73人	73人
在籍人数	74人	74人	73人

【入学前・後の意識について】

1 入学の際、「総合学科の高校」ということが学校選択の決め手になりましたか。

番号	内容	R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	総合学科だから入学した	22	36.1%	23	31.5%	22	30.1%
2	どちらかといえば総合学科だから入学した	9	14.8%	16	21.9%	18	24.7%
3	特に総合学科だからという理由ではない	20	32.8%	28	38.4%	26	35.6%
4	総合学科だからという理由では全くない	10	16.4%	6	8.2%	7	9.6%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

2 入学の際、「総合学科の高校」の特徴についてあなたはどのようなイメージを持っていましたか。
(R4は複数回答有り)

番号	内容	R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	一人一人に応じた指導をしてくれる	2	2.3%	6	6.2%	4	5.5%
2	自分の生き方を考える学習ができる	6	6.9%	1	1.0%	2	2.7%
3	多くの選択科目が開設されている	32	36.8%	30	30.9%	23	31.5%
4	自分の興味関心にあった学習ができる	40	46.0%	28	28.9%	37	50.7%
5	普通科目と専門科目をバランスよく学べる	15	17.2%	8	8.2%	7	9.6%
6	その他	2	3.3%	0	0.0%	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

3 入学前と比べ、入学後に総合学科をどのように感じましたか。

番号	内容	R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	期待通りだった	19	31.1%	30	41.1%	29	39.7%
2	やや期待通りだった	33	54.1%	38	52.1%	42	57.5%
3	やや期待はずれだった	6	9.8%	5	6.8%	2	2.7%
4	期待はずれだった	3	4.9%	0	0.0%	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

【「産業社会と人間」「総合的な探究における」学びについて】

4 産社・探究の時間を通して、入学時よりも自分自身について見つめ直すことができた。

番号	内容	R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	20	32.8%	28	38.4%	26	35.6%
2	ややそう思う	32	52.5%	38	52.1%	39	53.4%
3	あまりそう思わない	8	13.1%	6	8.2%	8	11.0%
4	全くそう思わない	1	1.6%	1	1.4%	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

5 産社・探究の時間を通して、入学時よりもこれからの生き方を考えることができた。

番号	内容	R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	30	49.2%	34	46.6%	34	46.6%
2	ややそう思う	22	36.1%	33	45.2%	34	46.6%
3	あまりそう思わない	8	13.1%	5	6.8%	5	6.8%
4	全くそう思わない	1	1.6%	1	1.4%	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

6 産社・探究の時間を通して、入学時よりも働くことに対して意欲がわいた。

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	25	41.0%	35	47.9%	28	38.4%
2	ややそう思う	29	47.5%	32	43.8%	39	53.4%
3	あまりそう思わない	7	11.5%	6	8.2%	6	8.2%
4	全くそう思わない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

7 産社・探究の時間を通して、入学時より社会の出来事に問題意識を持つようになった。

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	27	44.3%	33	45.2%	27	37.0%
2	ややそう思う	28	45.9%	32	43.8%	41	56.2%
3	あまりそう思わない	5	8.2%	7	9.6%	5	6.8%
4	全くそう思わない	1	1.6%	1	1.4%	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

【系列・科目選択について】

8 系列や科目選択にあたって、学校側によるガイダンス(指導や説明)は十分でしたか。

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	25	41.0%	35	47.9%	38	52.1%
2	ややそう思う	30	49.2%	33	45.2%	32	43.8%
3	あまりそう思わない	5	8.2%	4	5.5%	2	2.7%
4	全くそう思わない	1	1.6%	1	1.4%	1	1.4%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

9 系列選択の時期は適切でしたか。

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	早すぎる	21	34.4%	13	17.8%	13	17.8%
2	適切である	39	63.9%	56	76.7%	59	80.8%
3	遅すぎる	0	0.0%	1	1.4%	1	1.4%
4	その他	1	1.6%	2	2.7%	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	1	1.4%	0	0.0%

10 系列選択は何を基準にしましたか。

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	卒業後の進路	25	41.0%	34	46.6%	35	47.9%
2	興味・関心	24	39.3%	29	39.7%	27	37.0%
3	資格取得	11	18.0%	9	12.3%	10	13.7%
4	その他	1	1.6%	1	1.4%	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	1	1.4%

11 学年が上がる時に系列の変更を希望したいと思ったことはありますか。

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	ある	15	24.6%	14	19.2%	13	17.8%
2	ない	41	67.2%	57	78.1%	58	79.5%
3	どちらともいえない	5	8.2%	2	2.7%	2	2.7%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

12 選択科目の学習内容ははじめの期待通りでしたか。

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	完全に期待どおり	14	23.0%	24	32.9%	22	30.1%
2	やや期待通り	36	59.0%	39	53.4%	45	61.6%
3	あまり期待通りではなかった	9	14.8%	9	12.3%	5	6.8%
4	全く期待通りではなかった	2	3.3%	1	1.4%	1	1.4%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

13 12の回答の理由(主なもの)

- 1:完全に期待通り
 - ・自分の進路にあった科目に集中して取り組めたから
 - ・資格が取れたり将来につながるような内容を学べたりしたから
- 2:やや期待通り
 - ・卒業後に必要だったり役立つ力を身につけられたから
 - ・3年間興味を持って取り組み続けられたから
- 3:あまり期待通りではなかった
 - ・介護の授業での資格取得ができなかったから
- 4:全く期待通りではなかった
 - ・自分の苦手分野だったから

14 開設されている科目のほかにもどのような科目があればよいと思いましたか。

音楽、政治経済、情報、障害に関する科目、インテリア・ファッション、スポーツ、IT関連やプログラミング、美容系

【進路決定について】

15 高校卒業後の進路はいつ決めましたか。

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	入学前	12	19.7%	13	17.8%	8	11.0%
2	1年次	7	11.5%	6	8.2%	7	9.6%
3	2年次	19	31.1%	29	39.7%	25	34.2%
4	3年次になってから	23	37.7%	25	34.2%	33	45.2%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

16 進路は自分で学んだ科目を活かしたのになっていますか。

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	完全に活かされている	22	36.1%	23	31.5%	22	30.1%
2	ある程度活かされている	27	44.3%	30	41.1%	33	45.2%
3	あまり関係がない	8	13.1%	14	19.2%	13	17.8%
4	全く関係がない	4	6.6%	6	8.2%	5	6.8%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

17 現在の進路についてどう思っていますか。(R3・R4は複数回答有り)

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	希望通りで満足	53	100.0%	59	92.2%	64	87.7%
2	希望通りではないが満足	11	20.8%	12	18.8%	6	8.2%
3	希望したものがなく、不満	0	0.0%	1	1.4%	1	1.4%
4	希望している進路はあるが、未定	0	0.0%	0	0.0%	1	1.4%
5	進路は未定	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
6	その他	0	0.0%	1	1.4%	1	1.4%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

【総合学科での学びを通して】

18 総合学科で学んで、自分自身を見つめ、将来について深く考えることができた。

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	33	54.1%	39	53.4%	36	49.3%
2	ややそう思う	26	42.6%	25	34.2%	34	46.6%
3	あまりそう思わない	2	3.3%	8	11.0%	1	1.4%
4	全くそう思わない	0	0.0%	1	1.4%	2	2.7%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

19 自分の興味・関心に応じた時間割を作ることができた。

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	23	37.7%	25	34.2%	31	42.5%
2	ややそう思う	29	47.5%	38	52.1%	35	47.9%
3	あまりそう思わない	5	8.2%	6	8.2%	5	6.8%
4	全くそう思わない	4	6.6%	4	5.5%	2	2.7%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

20 さまざまな体験活動を通じて、幅広い視野を養うことができた。

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	28	45.9%	38	52.1%	37	50.7%
2	ややそう思う	31	50.8%	31	42.5%	32	43.8%
3	あまりそう思わない	2	3.3%	4	5.5%	3	4.1%
4	全くそう思わない	0	0.0%	0	0.0%	1	1.4%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

21 自分の好きなことを見つけることができた。

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	23	37.7%	31	42.5%	30	41.1%
2	ややそう思う	31	50.8%	35	47.9%	37	50.7%
3	あまりそう思わない	7	11.5%	4	5.5%	6	8.2%
4	全くそう思わない	0	0.0%	3	4.1%	0	0.0%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

22 学ぶことの楽しさを感じる事ができた。

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	とてもそう思う	25	41.0%	26	35.6%	24	32.9%
2	ややそう思う	30	49.2%	31	42.5%	38	52.1%
3	あまりそう思わない	4	6.6%	11	15.1%	8	11.0%
4	全くそう思わない	2	3.3%	5	6.8%	2	2.7%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	1	1.4%

23 総合学科で学んで満足しましたか。

番号		R4		R5		R6	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
1	大変満足	27	44.3%	31	42.5%	31	42.5%
2	まあまあ満足	31	50.8%	41	56.2%	37	50.7%
3	やや不満	1	1.6%	0	0.0%	4	5.5%
4	不満	0	0.0%	1	1.4%	0	0.0%
5	他の高校へ行けばよかった	2	3.3%	0	0.0%	1	1.4%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

24 23の回答の理由(主なもの)

3: やや不満

- ・自身の進路に学習内容が合っていないから
- ・先生間の連携があまり良くない気がした

5: 他の学校に行けばよかった

- ・自分の興味ある学問がなかったり、自分の目標のために挑戦などできなかったから

25 良かった点や今後も継続した方がよいと思うこと

- ・ガイダンスがたくさんあったのがよかったと思う。
- ・総合の時間の探究は今後も続けていきたい。
- ・探究で自分から調べることを学べたのは大きな成長だった。
- ・資格がたくさん取れるのがよかった。
- ・自分が学びたいことを学べたり資格を取れたりするのがすごく良いと思いました。
- ・探究活動などの時間では、先生が一人一人に的確なアドバイスをスライドや発表内容が充実した。
- ・自分でテーマや仮説を立てて調べることに集中できたから。
- ・一つの系列の中でもコース別に学習ができること。
- ・気になったことを自分なりに探究していくことを継続したい。

26 改善した方がよいと思うこと

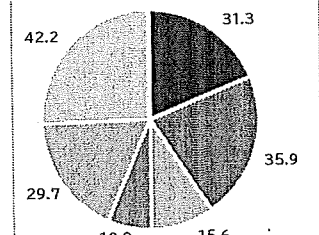
- ・系列の決断の猶予をもっと長くしてほしい。系列の説明をもっと具体的にしてほしい。
- ・校則の厳しさの基準が学年によって曖昧で理不尽に感じた。
- ・生活福祉であれば保育の授業を2年のときから始めても良いと思った。
- ・進路活動と重なって発表までの授業時間が少なかったです。
- ・進学コースに勧められて入った人が実は進学を考えていなかったのを見たことがある。
- ・もっと時間をかけて探究する。

令和6年度農業科学科生徒アンケートの結果について

農業科学科

本アンケートは、農業科学科所属生徒の実態を把握し、教育課程の改善を推進するための基礎資料とするため、19年間継続して実施されてきた。対象は農業科学科1～3学年全員とし、1～2月の期間で調査した。本稿では3問の結果を抜粋し報告する。

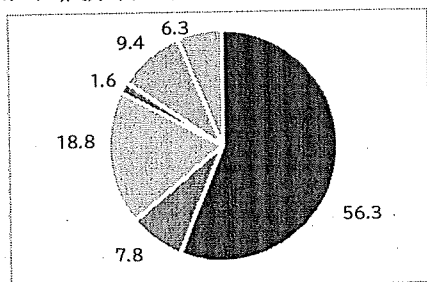
1 あなたが農業科学科に入学した動機は次のどれですか（複数回答可）。（%）



- ① 家が農業であるから
- ② 農業に興味を持ったから
- ③ 植物や動物を育てるのが好きだから
- ④ 友人も入学を希望していたから
- ⑤ 自分の家から学校が近いから
- ⑥ 合格できると思ったから

「農業に興味を持ったから」の比率が高まりつつある。中学生体験入学では、体験学習を重視し、高校生のアシスタントのもとで進行して中学生目線で農業に対する魅力を感じる内容にできる内容にした。次年度以降も、中学生にとって満足度の高まる内容となるよう改善していきたい。

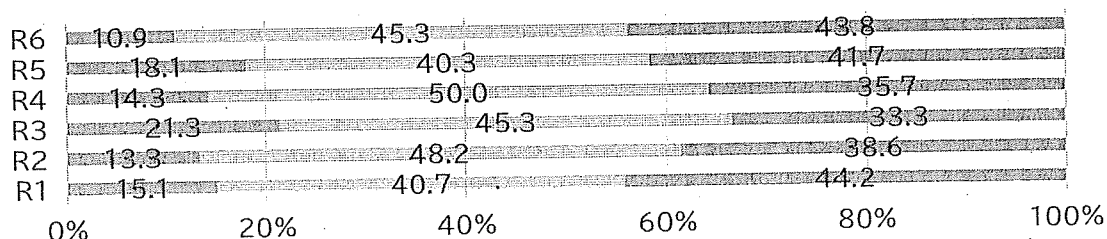
2 あなたは農業科学科でどんなことを学びたいですか。（%）



- ① 農作物の基本的な栽培技術(稲作・野菜・草花・果樹等)
- ② 栽培や取組に関する最新情報
- ③ 仕事に対する態度や心構え
- ④ プロジェクト学習を通じた探究的な学習
- ⑤ 地域農業の情報
- ⑥ 地域連携行事などを通して行事の運営法
- ⑦ その他

昨年度よりも「農作物の基本的な栽培技術」のニーズが高まった。座学で学ぶ知識と、実習で身に付ける技術の往還性を重視した授業改善を推進し、生徒のニーズに応えたい。

3 あなたは将来、農業をやりたいと思っていますか。（%）

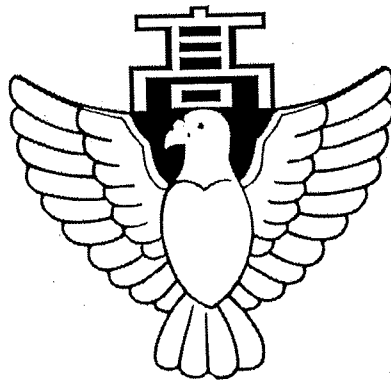


- ① 専業自営としてやりたい
- ② 他の仕事をしながらやりたい
- ③ 全く農業をやらない

今年度、農家の生徒は39.2%にすぎないが、非農家の生徒を含めた56.2%の生徒は兼業を含めた何らかの形で将来農業に携わりたいと考えている。今後も「農業教育高度化事業」や「横手市農業インターンシップ事業」等を活用し、地域をリードする農業者との連携によるインターンシップや講話、先進的な技術の視察研修等を実施することで就農意欲の喚起に努めたい。

職員研修・教科研修

令和6年度 研修計画



秋田県立増田高等学校

1 秋田県学校教育が目指すもの

豊かな人間性をはぐくむ学校教育

I 思いやりの心を育てる

ふるさとを愛し、社会を支える自覚と高い志にあふれる人づくり

- 1 人間愛の大切さの体得
- 2 開かれた心の育成

II 心と体を鍛える

- 1 生き抜くたくましさの育成
- 2 働くことの喜びの体得と意義の理解

III 基礎学力の向上を図る

- 1 自ら学ぶ意欲と態度の育成
- 2 幼児児童生徒の個性と能力の伸長

IV 教師の力量を高める

- 1 幅広い識見と教育愛の涵養
- 2 社会の変化に即応した研修の充実

2 教育方針と目標

教育基本法に則り、平和的な国家及び社会の形成者としてふさわしい人間を育成する。この方針に従い、次のような人間を育成することを目標とする。

- ① 心身ともに健康で、思いやりのある心豊かな人間
- ② 自ら学び、自ら考え判断し、主体的に行動できる人間
- ③ 正しい勤労観を持ち、郷土の発展に貢献する人間
- ④ 社会の変化に柔軟に対応し、21世紀をたくましく生き抜く人間

3 各学科の目標

(1) 総合学科

多様な教科・科目を開設し、生徒の興味・関心に基づき選択履修させ、将来の進路への自覚を深める学習や個性を生かした主体的、体験的な学習を通して、社会の変化に柔軟に対応できる能力と態度を育成する。

(2) 農業科学科

地域の農業の基幹である果樹と稲作を基礎として、生物生産と経営に関する知識と技能を習得させるとともに、地域の構成員として必要な資質を培い、地域農業の発展に寄与できる能力と態度を育成する。

4 重点実践目標

(1) 学力向上と進路実現

- ① 生徒の「分かる」を引き出す授業改善
 - ア 探究型授業スタイルの実践
 - イ ICTを活用した分かる授業の展開
- ② 生徒一人一人の多様な進路実現
 - ア 教育課程の見直し
 - イ 進路相談・支援の充実

(2) 全職員による生徒指導の充実

- ① 生徒一人一人の見取りと実態に応じた対応の充実
- ② 思いやりの心を育てる指導の工夫

(3) 地域連携の推進と発信

- ① 地域貢献および地域課題への取組
- ② HP等での積極的な情報発信

(4) 探究活動を通じた人間形成

- ① 生徒の探究的な学びの充実
- ② 生徒の自己実現に向けた指導の工夫

5 令和6年度の目標「元気な増田高校づくりの推進」

- ①生徒を輝かせる教育活動
- ②愛校心を育てる教育活動
- ③地域連携を充実させる教育活動

6 教員研修の重点目標

課 題	本年度の目標	具体的方策	研究主題
<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の主体性を活かした授業展開の工夫。 ・キャリア教育の視点に立った組織的な授業改善の取り組み。 ・教科横断的学力育成のためのカリキュラム・マネジメント。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員の資質向上を図る研修会を実施する。 ・生徒の主体性を引き出し、探究的な活動を導くための授業改善に努める。 ・生徒の実態把握と支援のあり方について、共通理解を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員の要望を取り入れた実りある監修会を開催するために、関係分掌との連携を密にし、校内職員研修会を企画運営する。 ・互見授業を実施し、授業改善の手立てとする。ICT機器の活用実践例を共有することで、生徒の主体的、探究的な学習活動を促す。 ・生徒の情報を共有し、必要な研修会への参加や各種研修会参加後の情報共有を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者との関わりを通して、主体的に課題を解決するための学習活動を重視した授業改善。

7 各教科の重点目標

	課 題	本年度の目標	具体的方策	研究主題
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の意欲的な学習態度をどのようにして引き出すか。 ・読む力、書く力、話す力の基礎の定着と活用の仕方。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が主体的に学習活動に取り組む姿勢を育てる。 ・学習習慣の確立による基礎の定着化。 ・国語の力を身に付け、良好な人間関係づくりの土台を築かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業のねらいを明示し、それに応じた言語活動を行う。 ・週末課題、家庭学習など学習習慣の確立を通し、国語の基礎力定着を図る。 ・多様な表現活動を通じ、伝え合うことの大切さに触れさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「生徒の問い」を引き出し、「わかる」を実感できる「主体的、対話的、深い学び」の授業実践。 ・学習習慣の確立から、国語の基礎力定着、学力向上につながる授業のあり方の構築。
地歴公民	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎学力の定着。 ・社会的事象に関心と課題意識を持ち、自らの考えを積極的に表現する姿勢や能力の育成。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎学力の養成・定着を図る。 ・課題の発見と探究活動を通して深めた知識や考えを、積極的に表現する姿勢や能力を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小テストや授業プリント等を効果的に活用する。 ・ICT機器等を活用し、社会的事象について考察させる。 ・発問や学習活動の場面設定を工夫し、生徒が意見を発表する機会を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の考えを引き出す効果的な発問や探究活動の場面設定のあり方を考える。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎学力の養成。 ・家庭学習の習慣化の徹底。 ・進学希望者の進路達成のための学力向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎・基本の養成と定着を図る。 ・個別指導の充実を図り、応用的な学力の定着を図る。 ・数学の学習を通して、真理を探究する姿勢を育む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒一人一人の実態に応じた適切な指導。 ・日常的な課題の作成と添削指導。 ・応用的な学習内容につながる授業展開と既習事項の確認及び指導強化（ICT機器の活用）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習を通じて「見通す力」の涵養を促す指導法の確立。 ・自発的な学習態度を育成する効果的な指導法の確立。 ・新教育課程に対応した進度の確立（ICT機器の活用等）
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎学力の定着。 ・中高の学習法の接続。 ・科学的な思考力、自然を探究する能力や態度の育成。 ・進学希望者の進路達成のための学力の向上。 	<ul style="list-style-type: none"> ・思考の基礎となる基本事項を定着させる指導を行う。 ・実験・観察を通して探究活動を行い、課題を主体的に発見、解決する能力・態度を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の気付きを促すを工夫する。 ・身近な事象や日常生活との関わりを教材に取り入れる。 ・探究型の実験・観察を多く行うよう工夫する。 ・ドライラボを含め、情報を整理し考察させる経験をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎・基本の定着とその活用能力を高める授業を展開する。 ・探究の過程・結果・考察を自分の言葉で表現する力を養う授業展開。

	課 題	本年度の目標	具体的方策	研究主題
保健・体育	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション能力を高める指導。 主体的・積極的な運動の実践を通して、楽しみながら知識や技能、体力を高める。 現代社会や自らの健康課題について考えさせる 	<ul style="list-style-type: none"> 新体力テストにおける体力ポイントの低い項目の強化を図る。 健康の保持増進のための知識、意志決定にもとづく適切な行動選択ができる能力を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各種目と系統づけた体力を高めるための運動を継続して実践する。 練習方法や戦術等について、効果的に話し合いの機会や場面を設ける。 生徒の運動能力、興味や関心の現状を把握し、理解を深めるための教材や場づくりを工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業を通じた規律の定着と生徒の主体的な活動によって、健康的な将来につながる運動の実践。 ヘルスプロモーションの考えにつながる保健学習の充実
芸術	<ul style="list-style-type: none"> 芸術への関心、意欲の喚起。 感性を高める指導。 豊かな情操を培う指導。 	<ul style="list-style-type: none"> 芸術文化についての理解を深めさせ、生涯にわたって愛好する心情を育む。 感性を高め、心豊かな生活や社会を創造していく態度を養い、豊かな情操を養う。 	<ul style="list-style-type: none"> 芸術の幅広い活動の中に言語活動を適切に位置づけられるよう工夫する。 ICT機器等を活用し、表現と鑑賞の相互関連を図りながら、能動的に学習を深められるよう工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> 芸術を理解する喜びを感じられる指導。 感性と表現力の育成。
英語	<ul style="list-style-type: none"> 新学習指導要領に対応した授業をどのようにして作っていくか。 基礎学力をいかにして身につけさせるか。 	<ul style="list-style-type: none"> 多様な音読指導により基礎基本の反復の習慣を身につけさせる。 小テストなどを効果的に行い、語彙力と表現力を身につけさせる 	<ul style="list-style-type: none"> 授業中に生徒が英語をできるだけ多く話す（読む）ことができるよう工夫する。 小テストで、小さな目標をクリアさせることにより、達成感や自信を持たせるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 音読の指導方法の工夫。 苦手意識を持つ生徒に自信をつけさせる指導方法の工夫。 自ら英語を学ぼうとする姿勢の育成。
家庭	<ul style="list-style-type: none"> 自己の生活から課題を見出し、いかにして解決策を考える能力を身につけさせるか。 	<ul style="list-style-type: none"> 資格取得の奨励ときめ細かい指導。 発問を通して、生徒の考えを引き出す。 問題解決するための基礎力として、知識と技術の定着を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活に密着した実技や実習を取り入れる。 実生活に即した例題の提示や発問をする。 ICT活用に合わせた教材を開発する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学んだ知識や技術が、実際の生活に生かされるような指導の工夫。 ICT活用と教材の工夫。
福祉	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に学ぶ態度の育成。 基礎的・基本的な知識と技術の習得。 	<ul style="list-style-type: none"> 福祉に関する基礎的な知識と技術を習得し、福祉の心を育成する。 社会福祉への関心を高めさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教材の工夫と精選。 体験的な学習を効果的に取り入れた授業の展開。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の成長段階や興味関心に合わせた事例の選定と展開。
情報	<ul style="list-style-type: none"> 情報社会に主体的に参画するための資質・能力の育成。 	<ul style="list-style-type: none"> 情報社会の問題解決。 コミュニケーションと情報デザイン。 コンピュータとプログラミング。 	<ul style="list-style-type: none"> 法規や制度及びマナーの意義、モラルなど科学的に捉える。 情報通信ネットワークのしくみ、データの活用について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 情報技術を活用して問題の発見・解決する方法を身につける。
商業	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的・基本的な知識と技術の習得。 経済活動や社会に対する興味・関心の喚起。 	<ul style="list-style-type: none"> 自ら学ぶ意欲を向上させる。 資格を取得するために主体的に取り組む態度を身につけさせる。 地域産業への関心を高めさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教材の工夫・精選。 授業を通じた規律指導。 資格取得に向けた対策強化。 外部機関との連絡強化。 	<ul style="list-style-type: none"> ビジネス場面を想定し、即座に対応する実践的な能力を育成させる。 経済社会の発展に主体的に貢献する意欲を向上させる。
農業	<ul style="list-style-type: none"> 実験実習に対して主体的に取り組む態度の育成。 現場の課題を発見し、科学的に解決する力の育成。 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な知識と技術を活用し、農業の振興や地域貢献に主体的に取り組む態度を身につけさせる。 実験実習を通して課題を発見し、合理的かつ創造的に解決する力を身につけさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 実習やインターンシップ、各種地域貢献活動等の効果的な実施と工夫改善。 農業ITセンサー、ドローンを含めた各種ICT機器等の活用。 	<ul style="list-style-type: none"> 実習や地域交流を通じた生徒の主体的態度、実践力の涵養を促す指導法の工夫。 現場の課題を科学的に解決する手段として、ICTを効果的に活用した探究活動の実践。

8 各学年部

	学年目標	重点目標	具体的方策
1 学 年	高校生としての基本的な生活習慣・学習習慣を身につけ、将来の進路を主体的に模索しながら適切な進路目標を設定する。また、社会において求められるコミュニケーション能力を養う。	<ol style="list-style-type: none"> 生活三信条を徹底し、基本的な生活習慣を身につけさせるとともに、高校生として必要な学習習慣を身につけさせる。 適切な進路目標を設定させ、その目標達成に向けて主体的に情報収集し、学力向上に取り組ませる。 学校生活や学外での活動に積極的に取り組み、望ましいコミュニケーション能力を育成する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1について <ul style="list-style-type: none"> 時間厳守、特に提出物の期限に努め、生活三信条を意識して生活を送らせる。 中学校の復習と遅刻防止を目的に、計画的に教材を選択して朝学習を実施する。 適切な課題を与え、予習を前提とした授業を展開することで、家庭学習の習慣を定着させる(授業の初回にガイダンスを行い、学習方法、予習・復習の仕方について説明する)。 2について <ul style="list-style-type: none"> 進路希望を明確にさせ、その上で系列選択ができるよう、適切な情報収集の支援を行っていく。 「産業社会と人間」、「アグリ・ナビ」を活用して、キャリア教育を推進する。 3について <ul style="list-style-type: none"> 生徒会行事、学校行事に取り組みを通して、協力することの大切さを教える。 学校生活において、自分の意見を発表する場面や、他者と意見を交換する場面を通して、コミュニケーション能力を育成する。 地域でのボランティア活動に積極的に参加させ、地域理解とコミュニケーション能力の向上に役立たせる。
2 学 年	中堅学年にふさわしい基本的な生活習慣・学習習慣を確立し、将来の進路目標を明確に設定する。また、社会人・職業人として必要なコミュニケーション能力を養う。	<ol style="list-style-type: none"> 日々の授業と家庭での予習・復習を大切にさせ、更なる学力の向上を図る。 進路目標を明確に設定させ、その実現に向けて実力の養成に取り組む。 インターンシップや修学旅行等の様々な体験活動を通して、望ましい職業観やコミュニケーション能力を育成する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1について <ul style="list-style-type: none"> 計画的に教材を選択して、朝学習を有効に活用する。 長期休業、週末等の課題の充実・適量化を心掛け、学習支援サービスを活用しながら家庭学習の充実を図る。 模擬試験の事前・事後指導を徹底する。 探究型学習を通して、課題解決能力を身につけさせる。 2について <ul style="list-style-type: none"> 個人面談により生徒の進路希望を把握し、適切な支援をする。 三者面談、保護者面談を実施し、保護者の意向を確認する。 進路指導部の「面接カード」を活用して、教職員間の連携を図る。 進路ガイダンス等を実施し、進路意識の高揚を図る。 進学希望者に対して、長期休業中のオープンキャンパスへの参加を促す。 3について <ul style="list-style-type: none"> インターンシップの事前・事後指導を徹底する。 修学旅行に向けた事前学習を充実させる。 普段の学校生活や進路・特別活動、学校行事等を通して、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を育成する。
	個々の生徒が最上級学年としての責務を果たしつつ、自己の進路目標の達成に向けて最後まで全力で取り組み、進路実現できるようにサポートする。	<ol style="list-style-type: none"> 日々の授業と家庭での予習・復習により基本を定着させ、補習等を通じて実戦的能力を充実させて、進路達成に必要な学力の定着を図る。 保護者との連携を密にして、生徒の学習へのモチベーションを保ち、進路達成につなげる 社会人として必要なコミュニケーション能力と自己管理能力を身につける。 	<ol style="list-style-type: none"> 1について <ul style="list-style-type: none"> 朝学習の内容を精選し、基礎事項の定着を図る。 放課後補習、添削により、実戦的な学力の養成を図る。 「キャリア・パスポート」等を活用して、進路意識を高める。 2について <ul style="list-style-type: none"> 個人面談により生徒の進路希望を把握し、適切な支援をする。 進路指導部の「面接カード」を活用して、教職員間の連携を図る。 進路ガイダンスや面接指導を行い、進路実現へ向けて意識の切り替えを図る。 3について <ul style="list-style-type: none"> 面接指導、志願理由書の指導を通して、適切な表現力やコミュニケーション能力を育成する。 課題研究の立案、実施、まとめ、発表のプロセスを通じて、コミュニケーション能力と表現力の育成を図る。

9 校外研修計画（総合教育センター）

講座番号	講座名	職名	氏名
A07	実践的指導力習得研修講座（高等学校2年目）	教諭 教諭	伊藤 智樹 藤原 一誠
○	実践的指導力向上研修講座（高等学校8年目）	教諭	橋本 俊樹
A22	中堅教諭等資質向上研修講座（高等学校）	教諭	長谷部 さとみ
A31	県立学校新任教務主任研修講座	教諭	小松 知彦
A34	高等学校新任学年主任研修講座	教諭	糯田 亜希子
C34	プレゼンテーションソフトによるデジタル教材の作成	教諭	奥山 美穂
C35	基礎的な動画編集とその活用	教諭	仲川 晃磨
C39	高等学校情報Iにおける指導の充実	教務	藤原 一誠
C45	主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり —知的障害のある児童生徒への「教科別指導」と授業改善—	教諭	福田 菜摘
C47	自校におけるインクルーシブ教育の推進	教諭	山本 博史
C48	発達障がいな子どもと保護者の支援	養護教諭	島田 牧子
※	学校図書館職員等研修会	教諭	中村 喜子
※	キャリア教育推進協議会	教諭	大沼 明子
※	令和6年度新任特別支援教育コーディネーター研修会	教諭	伊藤 智樹

※ 今後の通知に従って申込済み予定の講座等

○ 欠席届提出済み

10 校内研修計画

・校内職員研修（検討中）

2回実施の予定 第1回 生徒の理解・支援に関する内容等

第2回 不祥事防止・危機管理への対応（管理職主催）

11 校内授業研修会

授業実施教科のローテーション

- | | | | |
|--------|-------|------|--------|
| 1 保健体育 | 2 商業 | 3 理科 | 4 英語 |
| 5 数学 | 6 芸術 | 7 家庭 | 8 地理公民 |
| 9 国語 | 10 農業 | | |

令和6年度 不祥事防止校内職員研修会

- 1 目的 事例検討を通じ相互に意識を喚起することで、危機管理能力を高める。
- 2 日時 令和6年12月11日(水) 15:50～16:20
- 3 場所 会議室
- 4 対象者 増田高等学校職員(非常勤講師、非常勤職員を除く)
- 5 進行 教頭
- 6 次第 (事前に各自実施) セルフチェック
 ①グループの事例検討会(10分)「テーマの防止策を話し合う」
 ②1分間報告会(10分)「テーマ毎に報告」
 ③まとめ
- 7 持ち物 公務員ハンドブック、筆記用具
- 8 分担 グループ、担当、テーマ

1 E	2 B	3 C	4 D	5 A	6 F
土田 哲也	天ヶ谷 純一	藤谷 聡	高橋 洋	小松 知彦	藤原 一誠
中村 信子	大沼 明子	仲川 晃彦	佐藤 晴輝	糯田 亜希子	伊藤 智樹
高橋 由美子	佐藤 修耕	奥山 美穂	奥 健悦	押切 信人	武藤 めぐみ
山本 博史	齊藤 晃仁	長嶋 大樹	長谷部 さとみ	永須 裕貴	田口 尚滉
平塚 祥広	山代 和也	今藤 司	島田 牧子	藤井 亨	五十嵐 大貴
佐藤 広栄	小嶋 優実	丹尾 茜	藤田 涼平	福田 菜摘	田口 世人
高橋 啓佑					

- 〈担当〉 1行目の先生：司会、じゃんけんで負けた先生：1分間の報告
- 〈テーマ〉 A：交通事故 (p.20) B：盗撮 (p.26) C：個人情報 (p.28)
- D：飲酒運転 (p.18) E：体罰 (p.23) F：会計 (p.20)

※ () 内の数字は、公務員ハンドブックのページです。

保健体育科（体育）学習指導案

日 時：令和6年12月11日（水）5校時
 対象生徒：1年1組（15名）
 場 所：第2体育館
 指導者：永須 裕貴
 使用教科書：『ステップアップスポーツ』
 （大修館書店）

1 単 元 名 球技「ネット型」バドミントン

2 目 標

勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、体力の高め方や運動観察の方法などを理解するとともに、作戦に応じた技能で仲間と連携しゲームが展開できるようにする。（知識及び技能）

攻防などの自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。（思考力・判断力・表現力等）

球技の学習に自主的に取り組み、作戦などについての話し合いに貢献することや一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にすることなどに意欲を持ち、健康や安全を確保することができるようにする。
 （学びに向かう力、人間力等）

3 生徒と単元
生 徒 観

生徒数15名（男子11名、女子4名）で、クラス的人数は少ないが、全体的に素直な生徒が多い。運動をすること自体は嫌いではないが技術的に自信が持てない生徒が多い。授業では、お互いに声かけして活動する姿が見られる。

教 材 観

相手と駆け引きをしながらラリーの応酬に楽しさを見いだすことができる運動である。技能が向上することにより、相手を揺さぶる打球や変化をつけて打つことに喜びを感じることができ、さらにはスマッシュを打つてみたいなどの意欲がわいてくる運動である。

指 導 観

ラリーの応酬に楽しさを見いだすために、サーブを狙ったところにコントロールして打つことやラリーにおいて強弱をつけて打ち返す技術を定着させたい。ラケットコントロールが思い通りにできるようにし、自在にラリーを展開することの楽しさや喜びを感じられるように指導する。

4 単元の評価規準

知識及び技能（ア）	思考力・判断力・表現力（イ）	学びに向かう力、人間力等（ウ）
・役割に応じたボール操作や安定した用具の操作と連携した動きによって空いた場所をめぐる攻防をすることができる。	・攻防などの自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができる。	・球技に自主的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとする、作戦などについての話し合いに貢献しようとする、一人一人の違いに応じたプレイを大切にしようとする、互いに助け合い教え合おうとすることなどや健康や安全を確保することができる。

（各項目の評価 A：良くできている B：できている C：努力を要する）

5. 本時の計画 (6 / 10 時間)

(1) 本時の目標

サーブを狙ったところにコントロールして打つ技能を高め、ラリーを展開する。

(2) 展開

段階	学習活動	指導上の留意点 (教師の支援)	評価の観点
導入 7分	<ul style="list-style-type: none"> ○集合・挨拶・出席確認 ○体操・補強運動 ○本時の学習内容と目標を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ○欠席等を確認し、見学者には指示を与えてプリントに記入させる ○正確に補強運動を行わせる ○本時の学習内容と目標を示し、生徒全員に確認させる 	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 目標：サーブを工夫して打ち、相手との駆け引きをしながらラリーを展開することができる。 </div>			
展開 35分	<ul style="list-style-type: none"> ○アップ (打ち合い) 	<ul style="list-style-type: none"> ○互いに声をかけ合い、強弱をつけて動きながらシャトルを打つようにする 	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 発問：サーブにおいて、どんなところを意識して打つか。 </div>			
	<ul style="list-style-type: none"> ○サーブ練習 ○スマッシュ練習 ○シングルス簡易ゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> ○相手コートの手前や後方を狙ってサーブを打つよう意識にする ○打ちやすい打球を出して相手がスマッシュを打てるように留意させる ○ゲームのサーブとレシーブのポジションを確認しながら進行するようにする 	<ul style="list-style-type: none"> ○サーブを工夫してラリーを展開することができたか (観察：ア)
まとめ 8分	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の振り返りを行う ○後片付け・挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ○数名の生徒に感想を聞いて、サーブで工夫したポイントを全体で共有する ○全員で協力して後片付けをさせる 	

(ア：知識及び技能)

(3) 目指す生徒の姿

運動が得意な生徒と運動が苦手を感じている生徒が、お互いに関わり合いを大切にし、協力して一つのことに取り組むことのできる集団・人間性を育むことを目指す。

令和6年度 増田高校授業研修会 記録

教科 (保健体育)

研究授業実施日：令和6年12月11日(火) 5校時

科目・単元名：バドミントン

授業者：永須 裕貴

授業参観者：佐越先生（増田中）、押切、小嶋、土田、佐藤晴、奥、平塚、
島田、山城、藤田、丹尾

I. 授業者の感想

さまざまな実態の生徒がいる中で協力して取り組む姿勢が見られた。今回はサーブを工夫するという目標であったが、生徒は既習事項であるフォアハンド・バックハンドを選択し自分たちなりに工夫して活動に取り組む様子が見られた。授業改善に向け、他教科の広い視点でご助言をいただければありがたい。

II. 参観者の感想

【主体的な活動】

- 生徒一人ひとりの役割が果たされていた。
- 生徒が楽しんでいる様子が見られた。
- 指示が明確で授業の流れが分かりやすかった。
- ▲班ごとによる差が生じていた。
- ▲ルール（コートエリアライン）をもう一度確認させるとよい。

【表現する活動】

- 学びの共有がしっかりとできた。
- 効果的な手立てや発問があった。
- ▲指示が複数あると伝わりづらいので工夫が必要である。
- ▲グループの編成の工夫

III. 授業改善に向けた提案

- ・グループによって力や温度差があるため、今後は班編成を工夫して変えながら活動していくのもよいのではないか。
- ・目標にせまる部分の指示やポイントの示し方の工夫が必要であること。
- ・生徒が学ぶ場所や環境を整え、充実させていくことも必要である。

「体育科」授業風景



商業科（総合実践）学習指導案

実 施 日 令和6年12月11日（水）5校時

対 象 生 徒 3年4組（25名）

場 所 総合実践室

授 業 者 天ヶ谷純一 中村喜子

使用教科書 本校独自教材「ビジネスゲーム」

1 単元名 自由取引による模擬実践～ビジネスゲーム～

2 目 標

・これまで各自で学んできた「同時同業」の内容を基礎として、「自由取引」を通して、記帳方法を身につける。

・経済の動向（米ドル・東証一部平均株価・ユーロ相場・秋田銀行株価等）を見据えた仕入活動および販売活動を通してビジネス感覚を養う。

・会社業務に携わる意識を高め、自らの仕事に対する責任感、帳簿の記入や意思決定を通じて養う。

・業務に関わる各種機材・操作方法を習得し、主体的活協働的に取り組む。

3 単元の評価規準

知識・技術	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
・取引に応じた会計処理を適切に行うことができる。	・取引関係書類を適切に作成し処理することができる。	・仕事をする上で、清潔感のある身だしなみで授業に臨んだか。 ・業務日誌の記入が適切に行われているか。

4 単元の指導計画（全40時間）

(1) オリエンテーション	… 1時間	(2) 帳簿の開始記入	… 2時間
(3) 取引の指示及び自由取引①	… 20時間	(4) 中間決算	… 2時間
(5) 取引の指示及び自由取引②	… 3 / 10時間【本時】		
(6) 決算処理	… 4時間		
(7) 報告書の作成	… 1時間		

5 本時の計画

(1) 本時の目標

的確な経営判断により、商品を売り上げることで会社の利益を確保し、正確に帳簿に記入する（売上伝票、仕訳集計表、総勘定元帳、商品有高帳、当座預金出納帳、手形記入帳、切手管理簿、収入印紙管理簿）。

(2) 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価場面・評価方法
導入 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・規定取引内容を確認する。 ・本時の取引指標を記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全員が取引指標を確定しているか。 	
<p>本時の目標：各会社の判断で仕入・販売計画を立案できる。</p>			
展開 (40分)	<p>【販売活動】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 販売取引計画票を作成する。 2 関係諸帳簿へ記入する。 3 在庫の確認をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・規定取引を滞りなく処理できるか。 ・売買取引について、商品の在庫管理を徹底させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・取引を理解し、関係書類に記入できているか。 (思考・判断・表現)
<p>発問：当日の取引相場において販売条件の善し悪しを判断し、適切な売買を行うことができたか。</p>			
		<ul style="list-style-type: none"> ・小切手や領収書、納品書の作成に留意させる。 	
まとめ (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・業務日誌に本日分の作業内容を記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本日の業務が完了していなかった生徒へ次回までに本日分の残務整理を行うよう指示する。 	

令和6年度 増田高校授業研修会 記録

教科 (商業)

研究授業実施日：令和6年12月11日(火) 5校時

科目・単元名：総合実践 「ビジネスゲーム」

授業者：中村喜子 天ヶ谷純一

授業参観者：山本伸洋(増田中)、高橋洋、小松、仲川、糯田、藤井、長嶋
福田、今藤、藤原

I. 授業者の感想

想定通りの学習活動にすることができた。生徒それぞれで違う動きになるが、生徒自らが必要なことを考え、行動することができたため、まずは良かった。一社会人になると、事務作業や営業活動など自ら考え行動しなければいけない場面があるため、その練習の場にするすることができたと感じる。ただ、教員側の準備や活動中の指導が多くあるため、生徒1人1人に手が回らないことがあったため、そこは今後も改善していきたい。

II. 参観者の感想

- 生徒が自ら考え必要な事を実行していたため、普段の授業の積み重ねが感じられた。
- 周囲と協働し、書類作成や会計処理を行っていたため、他者との協働を自然とできる環境が良かった。
- 独自の教材を使い、企業を自走させる体験は貴重だと思う。
- △生徒1人1人に指導が行き渡らない場面があったので、改善が必要。
- △運が関係している要素があるため、何もできない生徒が出てきてしまう。

III. 授業改善に向けた提案

- ・教材準備を早めに行い、授業中の指導を充実できるようにする。
- ・運が関係してもいいが、救済措置のようなものもあった方が学習活動としていい→アプリなどを用いて改善できないか。
- ・1人1社を複数人で1社にすれば、何もできない生徒が減るのではないか。

「商業科」授業風景



教科書 高等学校 化学基礎(数研出版)

1 単元名 4節 酸化還元反応の利用

2 単元の目標

(1) 酸化還元反応が電子の授受によることを理解するとともに、それらの観察、実験などの技能を身につける。 [知識及び技能]

(2) 酸化と還元について、観察、実験などを通して探究し、酸化と還元における規則性や関係性を見いだして表現する。 [思考力、判断力、表現力]

(3) 酸化と還元について主体的に関わり、見通しをもったり振り返ったりするなど、科学的に探究しようとする態度を養う。 [学びに向かう力、人間性等]

2 単元と生徒

(1) 単元観

化学反応についての観察、実験などを通して、酸化と還元について理解させるとともに、それらの観察、実験などに関する技能を身につけさせ、思考力・判断力・表現力等を育成する。

(2) 生徒観

人文社会科学系列12名、自然科学系列の生徒9名(男子10名、女子11名)である。実験や発問に対して消極的であるが、指示を聞いて学習課題に取り組み、考察しようとする姿勢がみられる。

(3) 指導観

電池の仕組みについて理解させる。ボルタ電池を実験で扱い、電子の移動や金属のイオン化傾向の違いと関連付けさせることで、電池の仕組みについて仮説を立てさせる。また、クラス全体で仮説を共有し、多様な考えに触れさせることで、生徒の考えを広げ、深めさせる。

(4) 協議の視点

①生徒が目的意識をもって主体的に活動に参加しているか。

②課題や発問に対して生徒が自らの考えを持ち、他者との関わりの中で考えを深め、積極的に表現しようとしているか。

4 単元の評価規準

(ア) 知識・技能	(イ) 思考力・判断力・表現力	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
電池の仕組みを理解している。安全な実験が行える技能を身につけている。	電池の仕組みを電子の移動や金属のイオン化傾向の違いと関係付け表現している。	酸化還元反応について主体的に関わり、科学的に探究しようとしている。

5 本時の指導計画

(1) 目標 【ボルタ電池の仕組みを理解することができる。】

(2) 展開

過程 (分)	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価
導入 (3分)	1 本時の授業の流れと前時の学習課題「イオン化傾向」を確認する。		
展開 (44分)	2 ボルタ電池の実験を行う。 3 電池の仕組みを考察する。 4 学習課題「電池の仕組みと反応」をまとめる。 5 ボルタ電池の欠点をまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・失敗したときは動画で確認する。 ・電池の仕組みと実験結果を関連付けさせる。 ・電子の移動やイオン化傾向と関連付けさせる。 ・通常時と分極時の音の大きさを比較させる。 	(ア) 電池の仕組みを理解している。 [記述分析]
まとめ (3分)	6 振り返りとルーブリック評価を行い、授業の振り返りをする。	・振り返る視点と明確な判断基準を設定する。	

令和6年度 増田高校授業研修会 記録

教科 (理科)

研究授業実施日：令和6年12月11日(火) 5校時

科目・単元名：化学基礎・4節 酸化還元反応の利用

授業者：伊藤 智樹

授業参観者：藤谷聡、大沼明子、高橋由美子、山本博史、佐藤修耕、
長谷部さとみ、齊藤晃仁、高橋啓佑、五十嵐大貴、田口世人、
最上富雄

I. 授業者の感想

「ボルタ電池の仕組みを理解できる」という目標を達成するために、「金属の組み合わせ」と「使用する液体」の2つの観点から実験を実施した。2観点や既習事項のイオン化傾向や電子などを組み合わせてボルタ電池の仕組みを考察させた。おとなしく、基本的な知識が定着していない部分のみられる生徒達であるが、発問や実験に主体的にグループの友人と協力して取り組む姿勢を見ることができ、非常に良かった。今後、ICTなどを活用して、他者との関わりを通して自身の考えを広げたり、深めたりできる活動を実施したい。

II. 参観者の感想

- ・スライドで本時の流れを明示し、板書計画や適切な声かけ等で生徒が何をすべきなのかが分かりやすい授業であった。
- ・実験操作を生徒にさせたり、発問の解答を板書させる等、生徒が主体的に授業に参加する様子が見られた。
- ・1単位ものの難しさはあるが、既習事項を活用し考察を深めていた。
- ・発問に対しての解答の後に必ず「なぜそうなるのか」と問いかけ、理論的に考える機会を与えていた点が良かった。
- ・個人からグループへ、そして全体へと思考がうまく共有されていた。
- ・理科では本番が予備実験の通りにうまくいかない事はよくあるが、動画を活用してうまくカバーできるようになっていた。

III. 授業改善に向けた提案

- ・電流の方向を示すような装置があれば、より電池の仕組みの理解につながっ

たのではないか。

- ・実験の様子が見えていない生徒もいたのではないか。気の弱い生徒はなかなか行動や発言ができないので、手元の実験装置だけではなく、周囲の様子をよく見る事も必要であろう。

「理科」授業風景



令和6年度英語教育推進チーム学校訪問指導記録

研究授業実施日：令和6年6月17日（月）2校時

科目・単元名：英語科「英語コミュニケーションⅡ」

Big Dipper English Communication II（数研出版）

Lesson 2 Is Seeing Believing?

対 象：2年3組

授 業 者：高橋 洋

授業参観者：大沼 明子

指導助言者：英語教育推進チーム 深沢 志保 指導主事

<授業者感想>

- ・英語を苦手な生徒や国公立大学等を希望している生徒が混在し、学力差が大きい。
- ・様々な英文に取り組むことができるよう、速いペースで授業を進めることを心がけている。
- ・音読や retelling に力を入れながら、小テスト、課題、表現活動と組み合わせ、評価を工夫している。
- ・今回の授業では、新任の ALT にだまし絵を説明するという場面を設定した。

<参観者>

○良かった点

- ・生徒たちが積極的に参加していて、テンポ良く授業が進んでいた。
- ・生徒自身が様々なだまし絵を選んできたため、多様な題材に接することができていた。
- ・授業者が、生徒たちの活動状況をよく見ながら、適切な支援をしていた。

○課題

- ・発表場面におけるタブレットのより効果的な活用。

○改善の手立て

- ・機器操作等について更に研修に励む必要がある。

<深沢 指導主事 助言>

- ・得意でない生徒も目標を達成できるように、段階を踏んだハンドアウトが作成されていた。プリントがきちんとノートに貼られており、日頃の丁寧な指導を知ることができた。
- ・適切な支援により、授業の最後に生徒が発表できるところまで持って行くことができた。
- ・自分たちで選んできた絵に対し、生徒が身を乗り出して活動していた。
- ・ICT 機器と黒板の使い分けを考え、いかに支援し、どこで気づかせるかが大切である。
- ・難しいことを説明する際、英語で言ってから日本語で補足するのではなく、日本語で理解させてから英語で繰り返すと、英語が頭に残り、効果的である。

英語科「英語コミュニケーションⅡ」学習指導案

実施日時：令和6年6月17日（月）2校時

場 所：2年3組教室

対 象：2年3組

授 業 者：高橋 洋

教科書：Big Dipper English Communication II
(SUKEN SHUPPAN)

1 単元名 Lesson 2 Is Seeing Believing?

2 単元の目標

日本と世界の有名な「だまし絵アート」について本文の内容を読み取り、概要や要点を把握する。さらに、自分たちで見つけた「だまし絵アート」をグループごとに紹介し、協力してその面白さや矛盾点を発表する。また、「だまし絵アート」を活用した環境問題解決の取り組みについても学び、芸術の持つ可能性について深く考える機会とする。

3 単元と関連する CAN-DO 形式での学習到達目標

原稿を見ながら、1分程度のプレゼンテーションをすることができる。(Show and Tell)

ただし、原稿を読むのではなく、話すときは顔を上げる。(Read and Look up)

【GRADE 5 話すこと [発表]】

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>a. 側注・脚注の語彙や、Hints for Understanding の言語材料(関係代名詞の限定用法【復習】/関係代名詞の継続用法①/SVO (O = wh-節)/現在完了【復習】/過去完了【復習】)を理解している。</p> <p>b. 側注・脚注の語彙の意味や、Hints for Understanding の言語材料の用法の理解を基に、本文の内容を読み取る技能を身に付けている。</p> <p>c. 本文内容に関する話題について、事実や自分の考えを整理し、側注・脚注の語彙や、Hints for Understanding の言語材料、Hints の語句を用いて伝えたり、相手からの質問に答える技能を身に付けている。</p>	<p>a. 歌川国芳やエッシャーのだまし絵、大阪府豊中市の取り組みなどについて理解を深めるために、各Part本文の内容を読み取り、概要や要点を把握している。</p> <p>b. 本文内容に関する話題について、学習した語句や文法事項を用いて、自分の意見を話したり/書いたりしている。</p>	<p>a. 歌川国芳やエッシャーのだまし絵、大阪府豊中市の取り組みなどについて理解を深めるために、各Part本文の内容を読み取り、概要や要点を把握しようとしている。</p> <p>b. 本文内容について、学習した語句や文法事項を用いて、自分の意見を話したり/書いたりしようとしている。</p>

5 単元観

本単元は、「だまし絵アート」に関する説明文を聞いたり、読んだりすることで、「だまし絵アート」について理解すると同時に、それを環境問題解決につなげている自治体があることについて知ること、創造力を働かせて成功している例について学ぶ。扱われている言語材料は関係代名詞の継続用法であり、関連する領域別項目は「話すこと [発表]」とする。グループで協力してクラスに伝える活動を通して、新たな情報やものの考え方を得たり、整理したりすることで、芸術の役割について深く考える機会とする。

6 生徒観

生活福祉系列と芸術文化系列の生徒で、男子は3人で、女子が29人という女子の多いクラスである。授業態度は真面目で、予習を欠かさずに臨む生徒もいるが、総じて英語学習に対しては、苦手意識を持っている。そこで、内容理解に関する問題などはすべてペア活動で、やり取りの中で答えを確認させている。クラス全体に対して発表することに不慣れな生徒も多く見られる。本単元では、「だまし絵アート」の発表を通して、分かりやすく伝える力を育成していきたい。

7 単元の指導と評価の計画（総時数：7時間）

主な言語活動等（◎本時の内容）	評価
・「だまし絵アート」について、読み取った内容を整理し、簡潔に要約する。 ◎調べてきた「だまし絵アート」をグループ内で共有し、もっともおもしろいものをクラスに発表する。	・活動の観察 ・自己評価

8 本時の学習（本時3/7）

(1) 目標

「だまし絵アート」について、情報を整理しながら、分かりやすく伝えることができる。

(2) 本時の展開

過程	学習活動	教師の支援及び留意点
導入 10分	○Warm up 週1回の単語テスト範囲の英単語・語句の音読練習 ○「だまし絵アート」に関する Part 1 の説明を、Retelling する。	○大きな声で発音できているか ○「だまし絵アート」の特徴をとらえた説明になっているか
展開 35分	○本時の学習課題を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> Make a presentation of a piece of illusionist art and help an ALT, who do not know the art at all, to understand what illusionist art is </div> ○それぞれが持ち寄った「だまし絵アート」の作品を、グループ内で見せ合い、クラスに発表する作品を選ぶ。 ○ALT の先生がだまし絵アートのことを知らないため、英語でだまし絵アートの特徴を説明してその面白さを伝えることを目的とする。 ○選んだ作品の特徴を、グループで協力してわかりやすい言葉で説明する準備をする。	○表現方法について、グループごとに支援する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 【評価】 「だまし絵アート」作品について、わかりやすく的確に説明ができています。(活動の観察) 【思考・判断・表現/主体的に学習に取り組む態度】 </div>
	○タブレットの画像を電子黒板に投影し、それを見せながら、グループごとに、その特徴を説明する。	
まとめ 5分	○自己評価を行う。 ○Part2 の他国の「だまし絵アート」について読んで理解してくることを確認する。	○全体で共有したい内容や表現などについてフィードバックする。 ○今回の自分たちの説明の仕方と、次時に読む他国の「だまし絵アート」の説明を比較してくるよう伝える。

研修報告

実践的指導力習得研修（2年目）を受講して

理科 教諭 伊藤 智樹

1 本研修の目標

学校教育目標に基づいた教育活動への意識を高め、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての実践的指導力を身に付ける。

2 実施計画

実施月日		研修内容	実施月日		研修内容
5/30	(木)	教材研究 学習指導案の作成	9/26	(木)	問題行動の事例研究
6/20	(木)	学校教育目標と 学級経営	10/10	(木)	教育相談の進め方
6/25	(火)	研究授業 授業研究会	11/8	(金)	進路指導の進め方
7/4	(木)	部活動等の指導の在り方	12/3	(火)	校内研究授業
7/11	(木)	電子黒板の活用方法	1/21	(火)	本年度目標評価と次年度の計画

3 研修を通して

生徒が発問に対して自身の考えを持ち、学習課題を探究する姿勢を育むことができたと思う。実験の結果や生徒の発言を広げる対話によって、学習課題の考える視点を与えることができたためであると考えている。次年度は、他者との関わりの中で考えを深め、広げていく姿勢を養うことができる授業を実践したいと考えている。互見授業やICT機器を有効活用することで、自身の授業に不足しているアイデアを組み込み、授業の質を向上させたい。

学級経営では、志望動機を過去のきっかけや在学中にやりたいこと、将来像を交えて明確に書くように指導した。また、生徒の進路希望にそった資料を用いて面談を実施し、3年生における進路活動の見通しをもたせることができた。来年度は3年生の担任になることが考えられるため、見通しをもって補習や資料の作成などの業務に取り組み、生徒が自身の進路希望を実現できるよう、学校や家庭と連携して手厚い指導を行っていきたい。

実践的指導力習得研修（2年目）を受講して

商業 教諭 藤原 一誠

1 本研修の目標

学校教育目標に基づいた教育活動への意識を高め、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての実践的指導力を身に付ける。

2 実施計画

実施月日		研修内容	実施月日		研修内容
4/4	(木)	今年度の学校目標、学級目標の共有研修計画について	8/7	(水)	デジタル採点の導入・ICT活用推進について
4/11	(木)	2年生の学級経営について	8/26	(月)	研究授業（授業研修）
5/15	(水)	特別な配慮が必要な生徒への対応	12/11	(水)	商業科授業研究会（授業研修）
5/17	(金)	防災教育について	12/11	(水)	不祥事防止研修会
7/19	(水)	1学期を終えて 2学期以降の計画	2/3	(月)	学級経営の振り返りと 次年度の計画

3 研修を通して

昨年の初任者研修講座から学んだことを活かした研修がほとんどで、実際に起きた本校の事例などをもとにすることも多く、実践的な指導力の基礎が固まってきたと感じている。ただ、インプットした事をアウトプットする場面が少なく、生徒へ還元できているか、本校職員の方々にうまく伝わっているかというのは不十分だと自身で感じている。そのため、来年度の3年目研修では、アウトプットする場面があれば、積極的に参加したいと考える。また、教科の特性上、学習活動や校内外の活動では、他教科の先生方のお力を借りる場面が多くあると思う。来年度も引き続き、周囲と協働し、生徒の学習面、生活面での力となるよう、指導を徹底できればと考える。

本研修を通して、校内外の関係者の方に厚いご指導をいただきましたこと、感謝いたします。来年度も多分にご迷惑をおかけするかと思いますが、ご指導いただければと思います。今年度もありがとうございました。

選 択 研 修 報 告 書

所属校	秋田県立増田高等学校	職・氏名	教諭・長谷部 さとみ
研修先	秋田県立近代美術館		
研修期間	令和6年7月31日(水)～令和6年8月1日(木)		

1 研修の概要

7月31日(水) 1日目 午前 オリエンテーション、美術館の仕事について(講話)
 施設、設備・展示室の見学
 午後 「みんなのキンビ」プロジェクトについて
 受付・監視業務補助体験、研修のまとめ

8月 1日(木) 2日目 午前 広報活動と展示について
 午後 受付・監視業務、研修のまとめ、協議

1日目の最初に美術館の概要や事業について講話頂いた。メインの展示の部分だけでなく、そのほかにも作品の収集、保存管理、調査研究、広報出版、教育普及という事業があることも改めて認識した。所蔵作品は令和5年度末までで2,800点超であり、6割が日本画であること、秋田県は有名な日本画家が多いことを知った。また秋田蘭画について学芸員の解説から歴史的な背景やその価値に触れることができた。

「みんなのキンビ」プロジェクトは、近代美術館を核とした「地域課題」への対応、多様性を理解・尊重する価値観の育成、アクセシビリティの向上(人材育成・鑑賞支援ツール・鑑賞プログラム)などを課題・取り組みとして3年間の計画で行っている事業であり、博物館法の改正による「誰もが楽しめる美術館」という趣旨の元に取り組んでいることを知ることができた。またそのプロジェクトの中で、本校生徒もコミュニケーターとして関わっていることや活動内容も知ることができた。

2日目の広報活動と展示については、企画展の企画や展示に関わる業務、美術館の利用や連携について知ることができた。セカンドスクールの利用、出前講座やキンビ・アートカード、メタバースなど、美術館での様々な取り組みを知った。

2 研修の成果(今後への生かし方も含むこと)

今年度は芸術科書道の授業を担当しており、本物の芸術に触れることや美術館の仕事や地域での役割に興味関心を持っていたため、授業等日々の指導の場面で生徒に還元できることが学べたらという思いを抱き美術館での研修を希望したが、芸術という観点で学べたことは有用であった。また、地域貢献する高校生についてキャリア教育と関連させながら、美術館の果たす役割や意義などについても考えを深めたいと思い今回の研修に臨んだが、高校生の活動やアートを通じて人々を繋げている美術館の様々な新しい取り組みなどについて知ることができた。

美術作品の鑑賞方法で「対話型鑑賞法」というものがあり、これは「公共」という社会科の科目の中でも扱われているものであるが、この手法は他教科でも自分で考える力を養うことができる効果的な手法だと感じた。教科の枠を超えて連携し学びに繋がられることを再認識できた。また、自分が担当する書道や国語、ふるさと教育・キャリア教育の視点で、秋田の美術や美術館をさらに活用していける可能性を感じた。

今回の研修を通じて、秋田には誇れる文化があること、秋田県や県民の財産である美術品を大切に守り、文化を継承していこうとする美術館の方々の思いに深く触れることができた。秋田県民として、教員として、自分なりに取り組めることを模索していきたいと考えている。

令和6年度中堅教諭等資質向上研修

特定課題研究レポート

所属校	増田高等学校	職・氏名	教諭・長谷部さとみ
研究内容	A：本県の教育課題に関する研究 B：マネジメントに関する研究 C：生徒指導に関する研究 D：教科指導に関する研究 E：道徳教育に関する研究 F：特別活動に関する研究 G：総合的な学習の時間に関する研究 H：特別支援教育に関する研究 I：その他 (選択したものに○を付けること)		
研究テーマ	気になる生徒、特別な支援・配慮を要する生徒への指導について		
<p>1 研究の概要</p> <p>年度当初、学級担任をしているクラスの生徒状況を把握した際、気になる生徒や特別な支援を要すると思われる生徒が多く見られた。実際に学級運営をしていく中でも、事前に把握できた生徒以外にも支援を要すると思われる生徒が多いように感じた。学習面やコミュニケーション等での支援を要すると思われる生徒が年を追うごとに増加傾向であると感じる。学級担任としてだけでなく、関わる生徒に対して適切な特別支援的配慮・支援できる力や資質が今後更に求められていくと感じる。インクルーシブ教育システムなどへの理解も含め、生徒への特別な支援のあり方について検討し支援・指導の充実を図っていきたいと考え、具体的な取り組みを試行した。</p> <p>2 成果と課題</p> <p>1学期の初めに、中学校からの申し送り事項や基礎力診断テストの結果等を参考に個人面談を実施し、生徒の状況把握を行った。学習面や学校生活で困っていること、不安の有無、その他何か気になっていることなどを生徒本人から聞いて、学級経営の方向性や指導について検討する材料とした。生徒との面談を通して、本人が自覚している・していない特性、困り感の有無などを把握することができた。また、支援を必要とする生徒だけでなく、周りの生徒への指導、指導する先生方の協力を得ることや情報共有が必要なことも把握できた。</p> <p>このことから①支援を要する生徒への指導体制の検討②周りの生徒への支援・指導やクラス経営の検討③指導する自身の特別支援的な資質向上についての3点で取り組んだ。</p> <p>①気になる生徒、特別な支援・配慮を要する生徒</p> <p>定期的に面談を実施し、生徒の現状把握と情報共有を行った。担任との2者面談、学年主任との2者面談、担任・学年主任・保護者との4者面談など学年主任の協力を得て面談を実施することで、様々な生徒の状況を知り、情報共有することができ有意義なものとなった。</p> <p>また、生徒の学校での状況を定期的に保護者に連絡したり、面談を実施したり、早い段階から保護者と情報共有をすることで必要な情報を得て指導に生かすことができた。保護者の困り感を把握することができたため、スクールカウンセラーを活用し、生徒だけでなく保護者のカウンセリングを勧めることにした。更に、高等学校特別支援チームを活用し、支援や助言を得ながら今後の指導体制を検討していくことにまで話を進めることができた生徒・保護者もあり、今後の指導について見通しをもつことができた。</p> <p>日々の支援として、朝・帰りの提出物確認、課題や提出物の視覚化、机やロッカーの整理などを個別指導で行ったが、やはり改善には至らない。授業においても個別指導の場面が多くなり特定の生徒への支援に時間がかかってしまい、他の生徒への指導が手薄になってしまうことが増えてきた。</p> <p>発達障害の場合、本人の特性は基本的に変わらないため、特性に応じて環境を整えることが必要である。授業を担当する先生方にも情報共有をして特性について理解してもらうこと、共通認識や共通のルールのもとで授業を行うこと、ユニバーサルデザインの授業など授業の工夫をすること、生徒の特性によって学習サポート等、指導体制の検討が必要であることなどを再認識した。</p> <p>生徒自身が「自己理解できていないこと」、「特性を正しく理解できていないこと」、「自身が困り感を抱いていないこと」をどのように認知させるのか難しく、スクールカウンセラーやQUアンケート</p>			

の活用を行った。生徒の特性を把握し、適切な対応ができるようにすることや高校卒業後の進路を見据えて早い段階から支援していくためにも、特別支援チームの活用と校内での支援体制の改善を更に図っていくことが今後の課題である。また、特別な支援や指導を希望しない生徒や保護者への支援のあり方については、検討が必要であると感じた。

②周りの生徒への支援・指導、クラス経営の検討

支援を必要とする生徒自身が困り感を抱いていないことがあり、年度当初特にその言動からクラスで浮いた存在になっていることがあった。クラス生徒の面談からも、周りの生徒が違和感を抱いていること・困っていること、対処に悩んでいることなどが相談から把握できた。その様子からクラス全体での理解の必要性を感じ、クラスで気になる生徒への理解が進むよう努めた。

また、クラス全体として、配慮や支援を要する生徒やコミュニケーションがうまくとれない生徒やHSC (Highly Sensitive Child) のような小さな変化に敏感に反応してしまう生徒も見られるため、ホームルーム活動や学校行事などの機会を活用して生徒同士の関係作りの活動に取り組んだ。学年で年に2回実施したQUアンケートなども活用し、生徒自身の理解に役立てた。他にも学年でスクールカウンセラーを活用し「相手も自分も大事にするコミュニケーション」について講話を実施、クラスでも振り返りなどをしながら生徒のコミュニケーション能力の育成に努めた。講話後は少しずつ自己理解や他者や理解が進み、生徒の行動にも変化がみられるようになった。

ホームルーム経営に関して、1年生の最初の時期は特に、学校生活に慣れることや友人との関係性を築く上で大事な時期である。今後の課題としては、計画的にLHRの時間などを活用して自己理解や他者理解、人間関係作りの活動などを取り入れていくことである。学校行事などの都合もあるが、年度当初は指導する側として生徒の理解を深め一年間の指導に関して見通しをもつことが必要であるため、他の分掌などと連携し共通認識をもって進めていく必要があると感じた。

③指導する自身の特別支援的な資質向上

支援を要する生徒の理解のために、特別支援に関する知識や情報を得ることに努めた。「特別支援地域センターだより」などを参考にし得た情報について調べ、生徒の指導に役立てるよう取り組んだ。

また、特別な支援を要する生徒だけでなくクラス全体の支援やクラス経営に生かせるような知識や技能の習得を目的として、eラーニングを受講し活用した。メンタリングに関するもの、レジリエンスを鍛える内容、対人能力を育成する内容などは、特別支援だけでなく他の生徒にも活用できる内容を含んでおり、これまでの知識の確認もできたが、新たな内容も学ぶことができた。

eラーニングで学んだ内容は、ビジネスでの場面を想定したものがほとんどであったため自分自身の学びにも繋がったが、高校生用に内容をアレンジして活用できると感じた。今後の課題としては、LHRで高校生が活用できるような内容にアレンジし、計画的にHR活動に取り入れ、効果を検証していくことである。eラーニングはこれまであまり活用していなかったが、場所を問わずに様々な知識を学ぶことができる点は有用であると感じた。自身の研修として今後も活用していきたい。

気になる生徒、特別な支援・配慮を必要とする生徒の指導をする中で、発達障害や境界知能の子ども、不登校などへの理解も深めることができた。また、周りの生徒への支援のあり方や自身の特別支援に対する知識や理解なども深めることができ、今後の指導における課題も把握することができた。

中学校からの申し送り事項について詳しく分からない部分がある生徒もおり、必要な支援が適切にできないこともあった。一年生の年度当初は生徒の把握が難しいこともあるため、今後は中高連絡協議会だけでなく、中学校からの引き継ぎや情報共有など協力体制を構築できるとよい。情報交換会など実施している学校もあるが、特に配慮を要する生徒や個別の支援を受けてきた生徒に関しては、連携して協力体制を作っていくことで適切な指導に結びつけられると考える。

今年度取り組んだことで、特別支援的な面における学校の現状や自身の取り組む課題なども把握することができた。SWPBS (School-Wide Positive Behavior Support) 「学校全体で取り組むポジティブな行動支援」という内容も知ることによって、今後の指導を更に検討していく必要があることを認識するとともに、どのような指導ができるのか考えるヒントも得ることができた。

(A4判1～2枚程度、研究に関わる資料等があれば添付すること)

C-47 研修講座を受講して

道徳教育推進 担当 山本 博史

- 1、研修の名称 令和6年度 センターC-47講座 自校におけるインクルーシブ教育の推進
- 2、研修の日時 令和6年8月23日(金) 10時00分～16時15分
- 3、会場施設名 秋田県総合教育センター 1階大研修室(午前) / 2階講堂(午後)
- 4、出席者 標記1の対象者35名+公開講演参加者約30名
- 5、日程の概要
9:30～10:00 受付
10:00～10:05 〈オリエンテーション〉 / 1階大研修室
10:05～12:30 〈講義・演習〉 / 1階大研修室
「発達障害の理解と支援～子どもの困難さから考える～」
宮城学院女子大学 教授 梅田 真理 先生
12:30～13:30 〈昼食・休憩〉 / 1階大研修室
13:30～16:05 〈講義・演習〉 / 2階講堂(講演参加者と共に)
公開講演「インクルーシブ教育時代に押さえる学級づくり
のポイント」
宮城学院女子大学 教授 梅田 真理 先生
16:05～16:15 〈研修の振り返り〉
- 6、研修の目標 インクルーシブ教育の推進に当たり、発達障害の特性を理解し、気になる行動の背景要因を探ることで、合理的配慮等を検討していくとともに、多様性を認め合う学級づくりの在り方について理解を深める。
- 7、担当者から 本講座では、自校のインクルーシブ教育を推進する上で求められる発達障害への理解と支援について、子どもの困難さの視点から学ぶことができます。また、公開講演では、多様性を認め合う学級づくりにつながる、授業づくりのポイントや保護者や周囲の友達との関係づくりなどについて、より専門的で具体的な研修が受けられます。
- 8、研修の内容

① 〈講義・演習〉

「発達障害の理解と支援～子どもの困難さから考える～」

発達障害については、「分かっている」・「知っているはず」のつもりのもことも多かったが、その特徴の細部の再確認もできた講義・演習であった。子どもはもちろん、子どもを取り巻く周囲の大人にも、「見える」・「分かる」部分・状況・症状もあれば、むしろ、そうでないことの方が非常に多い。なお、「大人でさえ見過ごしている障害も多いのでは？」と、改めて気づかされた。そして、「発達障害的な症状に気づいていないことは、決して幸せなことではないのではないか。」とも、改めて考えさせられた。私自身、いつの頃からか、「以前と比べて、障害の有無に関わらず、誰にでも平等に接することがで

きるようになったのでは？」と感ずるようになった。また、子どもはある意味において、純朴だからこそ、「タイミングを逃さず、何が何故ダメなのか、または、よいのか」を、指摘する、褒める、認めることを、特に意識している訳ではないが、日々の教育活動の中で、実践するようになったと、感じている。ただ、教育活動において、何が正解なのかが未だに分からないが、「子どもの成長には、平等にシンプルに、かつ、分かりやすく、タイミングを大切に支援していきたい」との思いから、日々、指導と支援の実践を行っている。今後もこの精神を大切に、子どもの理解と支援を行ってまいりたい。

様々な問題を抱えている子どもと向き合うことの困難さを感じる日常において、気づきにくく、伝えにくくなっている今、やはり、子どもを取り巻く環境において、大人が率先して、「個々に応じた理解に基づく言動を通して、丁寧に丹念に粘り強い指導と支援を、子どもの視点に立って行うべきだ」と、改めて感じた。

② 〈講義・演習〉

公開講演「インクルーシブ教育時代に押さえる学級づくりのポイント」

今回の公開講演は、午前の話について、更に詳しく、また、講師の先生が教員時代はもちろん、発達障害に関する特別支援の指導や助言を行う立場で専門機関に在籍された時、直接経験された話も交えた、大変分かりやすい内容であった。

ただし、今日の学級づくりのポイントとして、「特別なことを行うのではなく、ユニバーサルデザインを用いた可視化をはじめとし、我々が普段実践していること」も多く含まれていた。そのため、「今までの取り組みを精査し、日々の様々な指示やその提示の仕方について、いかに工夫を重ねられるか」などのアドバイスもいただいた。

今後、多様性を認める雰囲気づくりを大切にしていく中で、「何気ない一言、表情も、生徒にとっては大事なことであり、ルールづくりを明確にシンプルに設定していく上で、その実践の中で学級・学校づくりをしていくことの大切さ」を知った。そして、先生方が歩み寄り、「欲張らずに、自分の特性を持ち寄り、また、出し合って、これからも生徒の安心で安全な生活のために、還元していくことを大切にしていきたい。」と改めて考えるに至った。

③ 〈総括〉

本研修の振り返り

本研修に関しては、講師の先生による丁寧な資料作成・提示がなされ、話し方も聞きやすく、様々な視点・立場で、その経験に基づく事例の話も共感できる点が多く、大変充実した研修であった。

発達障害の多くは、本人だけでなく、周囲の人にも非常に分かりにくく気づきにくいものである。また、子どもが育ってきた様々な環境が、発達にも大きく影響を及ぼすものであるが、ある意味、周囲を見て子どもに気づかせることも大事でもある。発達段階における様々な経験、周囲の状況から、「違う」「間違っている」ことを、「いかに感情的・強制的にならず、指摘や察知させたりする」ことでもある。

ただし、これには、大変な配慮・労力が必要とするが、改めて述べさせてもらうが、我々教員側が「いかに粘り強く根負けせず、タイミングよく・シンプルに行うべき」である。教育と指導と支援の三位一体であるが、

最後に、本研修を振り返り、「多様性」を耳にする機会は増えたが、「どのように向き合い、どのように対応していくかは、簡単なようで実際は非常に難しい。」ということである。しかし、「発達障害的な特徴を看過してしまうことで誰も幸福にならない」ということは、断言したい。

実践発表

第2分科会 生徒の実践的・体験的な学習活動を推進するための農場運営はどうあるべきか。
(農場運営、農業経営者育成、学校特色化)

秋田県立増田高等学校 教諭 藤井 亨

1 本校の概要

- (1) 大正14年に創立し、来年度で100周年を迎える伝統校。平成7年の学科改編により2学科体制となり、現在の定員は総合学科80名と農業科学科35名となる。
- (2) 秋田県高等学校総合整備計画により、横手市統合校は本校の校舎を改修し令和13年度開校予定となった。多様な学びを追求する総合学科4学級と地域農業を支える人材を育む農業科1学級設置と発表された。
- (3) 農業科学科は、特色ある教育課程の一例として、3年次にインターンシップや外部連携活動を容易に行うため「課題研究」(2単位)「実践農業」(学校設定科目2単位)を連続授業にしている。

2 作物部門の取組

【1】部門の運営概要

(1) 品種構成と作付面積

- | | |
|---------|--|
| ■ 生産圃場 | あきたこまち (111a)・サキホコレ (6a)・きぬのはだ (20a)・日の丸 (20a) |
| ■ 品種見本圃 | 70品種程度 |

(2) 販売チャネル

販売チャネルは多岐にわたり、JA・地元企業・事務部等の理解・協力を得て、自校販売の比率を高くしている。そのためJAで全量検査後、学校に引き取る数量が多い。

- | | |
|----------|----------------------------------|
| ■ あきたこまち | JA出荷・玄米販売(職員限定)・白米販売(特製2kg袋等) |
| ■ サキホコレ | 白米販売(特製2kg袋)・白米真空パック加工販売(2合キューブ) |
| ■ きぬのはだ | 玄米販売(地元加工業者)・パック餅加工販売 |
| ■ 日の丸 | 玄米販売(地元酒造業者) |

サキホコレの白米真空パック加工は、連携先の地元農業法人に委託している。精米作業(精米後の碎け米選別・色彩選別を含む)も合わせて委託しているが、役務扱いとしている。また、きぬのはだのパック餅加工は、本校に加工室がないため、専門業者に委託している。

販売チャネルの拡大を図ることが、歳入の増加だけでなく、高付加価値型農業の実践的な学習の実現、対面取引による顧客接点(タッチポイント)の増加にもつなげ、経営感覚の醸成につながると考える。

【2】知財力開発校支援事業(令和2~5年度)

(1) 事業の概要

本事業は、全国の実業高校・高専から公募で指定され(現在は普通科を含む)、活動資金として年間50万円を上限に補助される。例年、農業は全国で1~5校程度であり、最大4年間支援を受けることができる。年間3回の研究会や報告会が東京都で開催され、事例発表や研究協議を行う。

本事業の目的は、特許等の取得ではなく、知的財産権の認知や活用力向上である。そのため試作品の材料や教材の購入、研修の旅費として計上できるが、特許等の取得のために直接かかる費用（弁理士への依頼）や販売品の材料等に充てることができない。また、特許庁所管の産業財産権（特許権、実用新案権、意匠権及び商標権）を主体として扱うことにも留意する必要がある。

(2) 本校の知財学習

① 目標

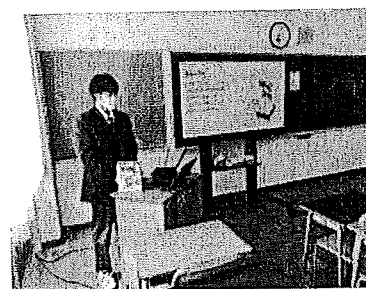
教科「農業」において、ものづくり教育を主体とした活動と知的財産教育の融合を目指す。

→生産・加工・販売の一連の流れの中で、農業の中にある知的財産を意識させる。

② 実践内容

■ 知財シミュレーション学習

- ・身近な知財を探せ！（J-PlatPat検索の活用）
- ・雪に関するパテントコンテスト
- ・NEO鍬を開発せよ！
- ・ネズミ捕り粘着シートのセールスをしよう！
- ・新商品開発のプレゼンをしよう！
- ・汎用性の高い車に改装しよう！



■ 校外知財学習会

- ・TDK歴史みらい館見学、TDK知財担当者や弁理士による講話

■ 職員研修

- ・全国農業高校収穫祭

知財を活用した商品開発やブースの作り方について学ぶ。

- ・アグリビジネス創出フェア

試験研究機関等の先進的な取組に触れる。農業の知財について学ぶ。

③ 成果

- 商品に対する視点に幅が広がり、安易な発想でも客観的に判断する提案が増えた。
- シミュレーションの範囲ではあるが、知財を意識したアイデアの創造力が高まった。
- 知財を理解し、開発者目線で課題に取り組めるようになった。

【3】特別栽培への移行と環境負荷低減の「見える化」（令和5年度～現在）

(1) 特別栽培への移行

① 新規ブランド米サキホコレの栽培を契機とした品質向上

令和7年産サキホコレから全量特別栽培に移行することが発表された際、当時の生徒の発案により、令和5年から試験的にあきたこまち（111a）とサキホコレ（6a）の特別栽培に挑戦することになった。以前から行っていた農薬10成分以内の「あきたecoらいす」基準に加え、化学肥料（窒素成分）慣行5割減で設定し、以下の取組をもとに食味向上と収量増加の両立を目指した。

■ 土壌診断

土壌改良剤・施肥の見直し

■ 各種センサー機器・自動化機器（farmo）の活用

■ 食味値検査

② 初年度（令和5年）の失敗と成果

× 収量減（分げつ数不足・猛暑による障害・胴割米増加）

■ 有機質資材の見直し → 令和6年からは、安価な鶏糞を最大限に投入

■ 農林水産省「特別栽培農産物に係る表示ガイドライン」に基づいた表示作成による学び

■ 生徒がSDGsへの貢献に気づき、どのように発展させるか検討

(2) 環境負荷低減の「見える化」（令和6年度～）

① 活動の流れ

ア) 農林水産省「みどりの食料システム戦略」の一環として活動開始

課題研究の情報収集の中で農林水産省の政策に目がとまる。

イ) 栽培履歴のまとめと農場への表示

GAPの考え方に基ついた履歴管理をそのまま活用。

ウ) 確認シートへの入力と提出

「見える化」の過程での3つの気づきが大きな刺激に。

・ 想定を上回る水田由来の温室効果ガス（GHG）の発生があったことに気づく。

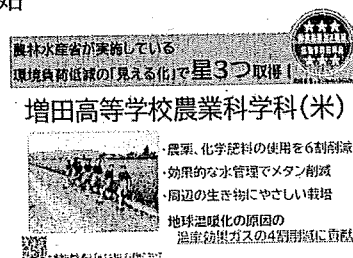
・ 秋起こしによりCH₄（メタン）排出量の削減が顕著であることに気づく。

・ オタマジャクシの変態、ヤゴの羽化を確認後の中干し開始が必要なことに気づく。

エ) GHG削減等級☆☆☆・生物多様性保全等級☆☆☆ の判定によりWで三つ星認定

高校としては東北初の認定。全国では2例目の認定。

商品に貼り付け可能なラベル「みえるらべる」が農林水産省から発行。



② 成果

ア) 小学生との農業体験交流学習を通して環境負荷低減について紹介・指導

年間5回の交流がある増田小学校5年生に対し、作物専攻班7名で協働して教えることで更に学びを深めた。

イ) 全国農業高校収穫祭をはじめとした各種イベントでの販売・PR活動

白米商品に「みえるらべる」を貼り付けての販売や専用POPを活用したPRを実施できた。

ウ) エコプロ2024農林水産省ブースで紹介

多数の来場者が訪れるイベントにおいて、優良事例の一つとして紹介された。

3 まとめ

昨年度、本校ではスクールポリシーを新たに制定し、育成を目指す資質・能力として①社会性②主体性③協働性④探究性の4つを掲げて教育活動を展開している。農業学習に係る地域連携はこの4つの資質・能力を深化させるために重要な位置づけとなっており、基盤となる農場の運営は常に地域に開かれたものでなくてはならない。農場で学んだことを地域で実践し、地域から学んだことを農場で再び深化・発展させる。このサイクルを通して生徒は、学びの深まりを感じ、大きく成長していくものとする。同時に教員側も地域に根ざした技術や経営感覚を磨くチャンスにできると思われる。

令和13年度に統合校が順調に開校できるよう、残り6年の準備期間で地域連携をより充実させたい。

編集後記

来年度の創立100周年記念事業に向けた会議を重ね、準備を進める中、校内研修の時間確保にも苦慮しました。特に、校内授業研修会については、準備を進めていただいている最中、実施日の変更を余儀なくされました。多忙な時期と承知の上で実施することとなりましたが、授業者はじめ皆様の御協力のもと有意義な研修会となりました。生徒が主体的に活動する様子、担当している授業とはまた少し違う表情で取り組む様子などが印象的でした。

最後になりましたが、研究紀要編集にあたり、原稿を寄せていただきました先生方に、厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

表紙 令和6年 2年3組 菅野 泰馳

「海を。」

令和6年度 研究紀要

令和7年3月発行

発行 秋田県立増田高等学校
住所 秋田県横手市増田町増田字一本柳 137
電話 0182(45)2073
FAX 0182(45)2088
メール masuda-h@akita-pref.ed.jp